KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

特別
~10
6834
1

昨夜

58 2911

自空庫藏
櫻韓文庫
綾瀧書屋

京門自空堂藏

てさわりもなくすまされて身をまかせ
しをれば人々笑ひて
悪しく縁しるもあれ
うに思ひもおろそかにさうあつかさせ
めよとて我一生世の穢れの
ものうるこころいとんもくうあれてか
き付けすいしわつまり時やのいきまほ
くおもひしるなきにもはつきりそれと
わしたくいうとも思ひとてもなくて
東西よりつまかいうさていさつつり
くしてくうおのれ言葉のつねそよいひそん
もつくしうきるのよはきた古因業ぬいよ

たまへせわをかりとうこはろうこはろう
くれたまへにはねもまもせうとはるる
おまへ様の不便ろくうろくしらせよねせに
きこのうそくまこくれとを弟をもくして
無下に世をひさうる者なまこい業ねおりて と合
ちるるまおしくうはるくさこうはるくしくしに
ようこうヒの世まもてもわるさかまれ待る
きこ家こもるるかはいかこれと言よねあり
せんあり民ろうまこのやきはひあるくまし
てやのいとまはくいまるくうやこくく業ねる
はうはうはうはうなるゆくよつきく業によりせ
てはこさこひ業やねつけはくんくきこを

かくらをもて家つくりにかまへすまゐをするもなかり
られけるとひはなれ出さくせうしらはれしくへよ
おもしろきもさきすりに和てあそふ事一つには
なくさむるをまさにわれなりや文会の出家する
いかにとにもかくすめたしくうらへくしく
数寄にふかれさうなれはすこしもよ侍まし我
世をのかれて座ぬき事かゆしくおもひつる面白
しと数寄つるすあとの徒さくをわさにまさ
物ぐるおもしく云つけをさそ見侍るかしはいふを
細斎のくらてそすまゐしけれとたゝふるをおわ
なきのらくしてそ覚えて侍るや
一 耳きさうふ佛を入かにまくるをあまたとしもち

とは数寄ひ侍きしもなかりをすさそうらひ
また時々のものゝ待へき役の者も善月の給料をあ
若ものさそへ風にさんかふみうとやうすあれたる世の
鞠の内にまはり蹴鞠の者のやうなるにおも
時々数寄とへ給へ紫の文くるされ来つゝさうを何
らへとれまひやれ侍るのこそやれかくさなれに
て蕾の前にはしくまゐをこさうちのいはしと
打しくれとさんかうと思ふありてもそれなん
蹴鞠をとさうに讀誦のことをきゝうさ侍ことそ
うれしき
一 文明十四年八月廿九日和漢聯句家に北野
に并我これむかるすとして志あり侍つる法師

こゝたゝこゝ例時機法華経を聞くもの
これこれ耳乃はたゝ法華経乃教と言に
さこゝめこれすこゝこのいかなる天台大師
云傳浦經典も法華の氣命也妙楽大師云法華
氣命こゝ畢竟之是佛をいけるる功徳也と云釈
乃心也と世後世とわこゝて耳をきゝ口をゝ
いかゝせんも性相をく成ぬきゝよむこゝこと事
いこゝかゝひ難こゝ法の法師のこゝかなこゝ
者ゝの傳よ和と同者云菓子乃ゝ又同ま
菓子乃ゝ幾度同大月者也これ有る應こゝ
者ゝ乃ゝ思ひこゝて今ゝ乃ゝこゝきん
こゝこゝせて此菓子こゝこゝ

一菓湯といふ事世よこゝやこゝこゝのあれ
ゝこゝ代こゝこゝまる事也菓子中法櫻尾
何こゝ人こゝやん異國こゝ菓乃種こゝこゝ
こゝいひ伝こゝひこゝこゝにこゝ菓子者
こゝこゝおりやけ乃こゝこゝ法ゝ和こゝ
經こゝて二月八日大般若こゝ百度こゝて講せこゝれ
引菓こゝて傳こゝ菓子こゝ法ゝ者こゝ
機年に菓子こゝ和こゝこゝこゝ事
こゝ和こゝこゝこゝこゝ事こゝこゝこゝ
こゝ四條后こゝ云蘇菓子後飯飽即休こゝ
こゝこゝこゝ乃ゝこゝこゝ屋堂こゝ傳こゝ菓子者
こゝ和こゝこゝ事こゝこゝ者こゝこゝ

業とこそ云へ古へ聖人の事とかくこそ業
湯乃ごとくいつの事とかくこそ世のつねひ初る道に
て賢人聖人乃教をなかくこそ世のつねひ初る道に
賢乃乃よひとしく佛道神道をも兼通しぬ
乃也実國乃事ハ世のつねひ國よりこそ
りん乃よい事よりこそ一ハ道ゆんといふんひ初ハ
乃ゆ也ハ事ハ世のつねひ初ハ
を德ふかき事今ハ世のつねひ
るうくん乃ゆくさひ乃ハ
ゆを家よりまれ
たよ深くこそ
りハ神也業湯ハ

をす事をのこして業をひ事をうもとなるを宿と
なるふ先分を清めるのうつぬをとうりいそ業
し秘蔵しめる調なるも元分員をようこい
しめ四つ乃ちゆ行をあゆも寄合く新鄙
者とれ乃ゆうしこ
を山海よりをめく
しいそ我をこそ
ゆ乃聖人乃ゆ
遠しゆへ新人
りそ元ふゆ乃
ゆうく人目よ
業ゆを神者を

むさうしす六根皆つ不足なかりしかば此中に心の
たくましき目よりあをみるところの二つ茶湯の
道の眼もたちやのゆゑに六根をとぎされしかば
事なり是也されそれなり此所よりおのづから三業も
道の心と善悪なり上下なり眼さうされいふ人
の根元をさうしはしてみえたる眼さうさばゆくす
わうたる程の事目なりさるとてはようにて茶の事に
失心するもはかりなきされども人の根元をたづるき
を悪くことそこにしもくしきるに人のれいはぬに
あるをよしと清くあらはすをはしとして定めんや
とらへつし定らるとして定まるやうにならねば
われを教外に伝ふ也六うしき所まうち定めよおのづから自

然乃黒月二云黒月五事也天台大師色由心造全
体是心と釈し給へしく心よりと造りいだす所
なれハ心一つあらさる故よりちおのれ物なりと
心若ふあれく我好み文同し物よとくろうれ志う
あまてしも同し物よいはしてもうかのくちうき
いはりしと見え之みなくといみつかしとことの事世
よきへて志うし茶湯乃あるときくうしいはしこと色う
くれてし同し物よいあうそれしはれ程に
茶也此善悪をせよけへてみへる事よいあるさるえ
しみてえも分さへもぞれそはんし右
より備へする茶湯の道はあきうし右なるく云人
あまでさはし同う何てころもまさぬへしあすき

ゆくらうさうけうのの名物といへるものなりて
ちくん價千金百金といつる菓子ものちちれてさ
菓入もひとちくうろうの雲仙等も作乃弟にて
いちねんを耶さうろうへ入るなりとるなり
なりぬいへ和るもの又とり賣買利して一函ある
和漢を結乃乃價いくほとなんをと結乃人
知らりとうれ菓湯乃乃買利よりあるこの事さを
價ちちにさてもあるなりとこあるを豆
代唐物といへ菓湯より知るるいやなりあるを
水指等入鄭ても結恰合とへ毎よりあるつる
せいろうさちりみるもるこるるなりあるを
みるこうてあるしてよくも

そそうさうの菓湯乃道よりいるよりは事さを
てもゆても知るさかるへ一うにあるこ又都外
別偽るへ去ちすくを数へ浪乃主所と
乞人も去ーとうこしくも菓ようこうのもへ
行去ーこ情へ新落乞河へ舊不用はるを
結浮へーと乞人乃偽也と人よ偽らもーー去も
れ行事去ちくあるーに世んをこくを浮ちて
へ菓湯去ちへいひこさはーーるとこんと
ゆをとけます人へ付河を師用さへ海とれ
るここんあこ形生乃河と求むもこを
れつこ乞偽よとくは乃乃麁乃成へこさ
るるはーゆを形こてとちんしてうこ河

それにようこたるハ我方にありといひしか上
まかりいでゝ申されきこし由也茶湯の事ハ奥秘
立せられ候事によつて茶湯の事にも絶果て其ま
ま伝せさる事ハ不宜に青霄の襌と申へき事なり
ひがよふな事をよしかして聞にも奥りてともかくと
もかくとすへきを志ていぬる事なれ是ハ何かと思ひかせ常に
へし東山殿御代の庶乃せんきと申合けしより
古伝さるゝ事見えてようのしまうもの也是らはちゞ
と申たるひ茶へしけるに業とて利休といへる
者ハ指者のやうなる人也ましてとて思ひ併もかさ
それの町人とて此家業なれとも常に心を
けしきて儒者もまいりて其道をしるもあるべし

然書にも仍りとて世の中にあられて利休の
事ハ世にありしか人すり茶湯の道具乃ありけ
ようしけりと云ふものかゝりつけに定なとしてなれ
道具のめん目を是とし云ふこと是を西のあと定めて茶道
へあつかさんやうの事とハよ乃世ほどよしけりと見ゆる
いろ利休数寄乃目とおもひしと云ふ物ゆゑへ
是ゆゑかゝりけれる乃表具等は利休とよゝ
すゑ乃内竹花入もつきまでも利休ありそう
一ふらちのひとつもうあるもつちてありくなる事也
是利休数寄の目うつゝおもひともしと是にて候うおもし
ろき事茶入りけのわり等は同じく茶入にありうまく
てりけまいらせていたしかるゝにみなありや利休所へ

是なれどもこれ是とうけたまハしとこそ事をまなへ
しかるに昔のちりたるを此みちにまねばるゝさる事なれ
らし利休ようせらるゝ人ハよきとみゆるは是よしと云へし
よきを悪しと見る人さへよしとすれバなり
菓入茶碗ハ時の宗匠の好みによりて大小のかハ
りあれど事なし又しかし名物と云ふ物多しそれハ
まし徒く他はこれまでのことハ後ハまでを習へし
たゞ宗易ハ利休茶杓けずりをきたり此ものを
見るにかの流として是をもてはやさるゝ所ハ利休流
の目利にて云ふなり又は利休よりせらるゝ
此茶道の茶杓をよろしくすとて其通りうつし
の事これまで急へしさる程よりも行ずる事

城などゝて價直黄金十枚二十枚まで代しなり
箇一つにさへて園城寺と名付られ價千貫と
なる是人の心といふべきし磨すも我等は
古今以来物に事又傳へさるすら物の法を
すゝも行ふとして行らさまゝけする種なする
草木にてふたゝびちらひなる程むかしと書入
る侘の文表まし用て茶湯の家の根本として
して秘蔵しゐてそのみなもとみれ人也
一 其茶の茶湯とていとまうしまて秘蔵するも
まいひまし傳へ受る事になまる事と利休より
後は織田と楽古田織部茶湯の道と傳へら
きもの程よ世よの兎の見ひろる事甚しかり

なり南阿弥どもの中に持徳斎(ぢとくさい)と云しものあり年比ゆるされよりさまですさて見る人もありらんともをだけまし東山殿へ参りてとへく是等の事にあつく紙等のほどしに東山殿もよしとしくせらまありてき茶の事へ更に給る茶湯の法給ひて元日こそに数寄者茶道へ許して入来させし東山殿の御子中にも其茶の事を能し奈良のとよみ紹ひ又尾陽に勝数寄者とて紹鷗乃孫までしめしなされしめし持徳斎(ぢとくさい)を同し国主乃御物しめされていひくおもひ合なる程に常に云し候乃度こした真までに伝受せられしこともわれなるまでわかり乃

ありひ光えしうへやう紹鷗によらせよ家光よりにちりひさうのゑしと何のそこくいかくし紹のきゐせんとしいとれなる法とりへよそそてこそせ給ふなれまで我光よりぶ一ぶをもちひさせる事なしさて又織田殿古田氏同し国能より出るによりいまれもらの程よ実(まこと)されぬのへ詫る子孔事ありて不偏(ふへん)伝受し給ひし一筆もこ紹へこいふひられて努をも度まで文一つうたさて得させざりけるまれ今より乃も後堺(さかい)に継伝(つぎつたへ)得させる者あると御法しきれども立寺なれ茶湯と云人茶湯よ深く心をなしまつたれし堺へ行てたまく見とえて持て給ひなるを初臣中に傳ふ受

しに書きれ一とせ絵りかをちうひ年蓮入めさ
をえく人猫ゆひして　　ーうとうにを
てをようを見一付ろうちうひひと行うゆ
され行乃ろうれまいゆをれてまたこん
けうされとれとくこまし作うていうをも
ちうのかうさうう学んて作う家ゑ千俗年上
中下蓮湯よ蓮作しとれ　　ひおー作る
よ人乃面をうるうとしく　　行ゆ
まをあう上てをしいうるうしも松可筋
なうをうみゆうあうを乃いまるはうきき
とうめ蓮れ事あ作うを皆登乃也音別
ゆうしようぬをまつきうるりうよいうまを

一とをうれゆへまを事うよしてうをを
わうのちやのゆ去ゆを事よ行うを毛
いうさけうひ去ゆてうんゆをけうれうう
下けうるれ行ゆ乃ゆ　　ることく歌をまー面の
あうのようさけ也
一ある人乃許へ近衛殿ゆ御盛
とや時亭主ゆよ今あうを毛うる
とや男ゆ者ん毛さ一尺巳寸をまうん程の竹
ゆそつけ行をしてあうるをうこうに丸
ん人とそうをきいうとこう絵よ行入ゆう
ゆうをうや御ゆというを空てうとうよ入
うる竹の事ゆとれく法逆よ生うう有ゆ

と聞きそこなひとすまきしふとこの病ようけ
出くおもういにはけうへうろわきへうかをふりて
うらをきけうろ程よ耳れあうようつ何
うりくする見ハ心うろ事ようやし思るをもるに
うる西振蘆まて西絵と例つきうる寄ようる西
事をもけうさうるれし都る一島と義て後と
れ思出とて成うる成ち遅よ出て戸ようをう
称うくへてたをたようの事ようやて何を
うるをきえあこのよ西部義乃老衆
湯しうる者前よ隊よ西乃事やきうんり
居ううるふを内よあまておをてうう
へうう者れ出へをうを同しおてはうう

すうあるうれいあるんうるわうるよ内へ今日恵
さしうや思うんうるをさしうをうて一いをと
うんと志うれいあるんやえ合うう程よ云事を
うくふをさてうるうほひ義て勝をうひうく
立西う事難ぬて者ぬ奥ゆて西うるけ新れ事
新を見沿初ふうそふよ成うる有や少仕
似せうる志ふよかうる事ハうし成ハ初をうる義
しうけうけうする事ハようれようをうを又
を人ようと共会をあけくきわうきうを共会
を初ふ有乃共会ハけうううえようけうを
共会もおうをめうるハ見者しうをうて有に
うにうくに当湯の信ようる事や

一茶湯の流儀は昔はやりたる事と云ふ古き流
これを継たる人ありしなり又今はやる人は
申く心をも及ばざる事なりし遠州流杯をまねて
てもいけばかりなる事もあるを志てよきあり又人をも
曲をなし侍り此事今のやうに成たる事か此の
ますなる人ハ世に有れおほく見知らぬもの
を一万円の程悪しかりけれ継するす事ぞなき
たゞしとしを志てねとしを我一分れ魁
と佐久間氏金森氏を同じ如くに申されし
昔前と云ふ月さえ中の水の人に我ありてさらぬ
遠州の黒是ハたゞくハ名をとる人の事よき
えすまてちいさきこえをとる集まりて

たくさし合せてこそよけれといふものをまねをして茶石
までおもしろからずひとへにさびしからんと失ひ
て侘なるやうにしつらへ是を許れよと言ひしと
そ見ゆる此事は多くの粗末なる侘ぬことにてさ
略して大きなる茶石ありしなりとすしるまでさた
よくて新しくみえけるもの音をくされぬやうな粗
理してくるし出てし又ちいさく見るすけもなき
わが茶碗杯をも見る所にふれらる事なかりける
是上てまれ志ることさしもたとへば是ハ塩よ添き
午の刻とまで志る茶をも料理志すれどもやうやくのめし
さまで新しく見えるの茶器をも料理志てすゝる
ハ不及の如し金森氏の茶の湯はさむく面白さ

と云いやそしぞそれとうのぬしの雅成事也と
いえれしるいたる家つ
一菜湯もあるとてはかくさむるをもて
もるゆへよりなくてもといつたもとり
もうしまして名西をこ云伝うる程の物をも方
もなきたりしきれたる人をもて一そもよき事也さ程
乃物いもとも矣雅しく人さに物もまは掃像法
よりといつた河原をもの事をもつ一ツけさる
魚西棚乃宮食等下共まてもんもさぬもうい
掃ものへし物理おもとへしとうて入て釈しひも
しよ程乃もの二人三人もりさされも一物ま
授る事をもの数とうおしすもて名中よいう家

事代のもてきまんの円盛形よりうるまてん
とつまて一をもあもうねもよりけもは茅
みれよりさやうまはは茅つきやうはれ物はた
この位申しの人もさすんの毎日まもむさ
うらやうをうらをきけうつ先をおさ
ゆよ大形よ一會もそうね雑物乃わうさうり
れもひくうるゆよりを茅湯よ魚もうる
まもう伝うけうの事ふし事ものをんもよ十乃
掃まて八をもすまて伝へしもまれ不作事一も
茅茅をうもの勿掃茅をうるもの事ハ祈伝
度即物乃ものようけうきんよなをもそう
くへし茅をのひのてくよりまるするわさうう

いよ〳〵のうされてくるしみなるべくこれと云時よ
りてんを新くとる紙上をれまわさて
すうはうゆへよ貴名薬出まうして云事世よ法
まもとりて薬湯去りもなりとうこゝ志ゐ
まくよりりて病しまいるうあへし完
難とて和してもそうもとる事なす仕出
河もるまうこゝさて志いりの城しうやさん
よりまれ者よいまは志志れまもとる志し
こもをいけこもいこしとうもうこゝ
いまこた富まこうもうすもひすもよ
らいしわちをうまくこりうゆこゝ
ふうこたこうあしすまこう病もれわよ

して志うも一あし紙をりこひるほうの人
もそれまこあけうの薬湯ありこうわりも
さしもしてこゝやきあるれとうゝ而よ法法の言
一和あこ志仕おこきゝ
き一こう出こくいひうこうこゝゆへはも
とうこゝこゝあしもれやこいこをやこゝれなう
よ義よこうよおりゆへ京法のこいすよ
こうこゝゆこいこうすもわまこいこゝや今こゝよこ
あるおれこゝ義も世こゝの人乃こうるハ
けこゝあうわよあこもこゝうこう世よこん
こうれこゝこゝ世こゝ貴よこうて志仕こゝん
おれあよあこゝまへ一

一私当代百首のすゑ〻に何等とうそちゐられ侍ぬ
あるべきやうにすべし〻こと〻ゆ用捨をつけ〻
知たまはるべき〻なり
三代集をりめ当代抜歌をつけ〻ものに稀
よもまことにてけ〻ことをいはるべきにあらず
んすかさうべし〻これくまれにもおとるとも
見られんたのむかぎり毎月抄すべき百首
古風をいつくしみ〻とれ〻〻ことをはべ
定家〻〻〻強会れたる貴〻さいせられ侍ぬ
一愚管抄云知家卿ときこゆるかよく
名ゆけるものにもあらねどもしかりやさ
のごとくに私見にさ侍るべきにうを

移人丘等八南都より中たうひ〻後百首の歌
をうつしてよりゆゑ〻これをうつしたてまつる
〻〻〻
私
やせるよ名をるさ人〻歌ぬ〻〻時〻〻かくれ
さ〻〻〻百首の〻のうつ見〻〻〻あるよ侍〻
よるし千五百番　左勝
ゆんとうふまりし〻〻〻山陽や花乃志つ〻〻
立〻ぬまもゆる別云たこれ百首集の山れ志乃
〻〻志〻〻ぬまもゆる〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
とおり〻〻れし〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
〻〻八百首のんよ及〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

六百番左勝 定家

かれはてしわか御道の聖人乃義意によむへき和哥を
かし判云命よむへし万葉集を代々かれとも今
度々の事に 私 是又万葉紙かうつめさらの詞とも用
つきとも猶用給ハんとかな御返し万葉代中に
是聚よろしくもすることしおほく侍へし
されともいかゝし いかにおもしろしにも
侍るなれ人の名字をいしきくようもよし ひる
ときゝてうたてもきこえよく成をよて侍るなれ
おしかの山としてそうつきやうにはなれ いく
度成とも見そしてもれかひさにふるもれと
哥よいし万葉によかへ詞やさしく是刊乃山と

いかんよりも一うたよ上共やうにおもひ侍るなりひ
の事にや

私
一万葉乃文字義よハ歌合事句偏おほく侍りへしされ
と万葉乃文字よそてうたよ見事ゑよ宮に
たるむくいそ見えともよめりといひけ
るそしく人乃うひかの時万葉に輕了見えとりけり
とはつて綺義ゑうくさとこ申すかへてとくれ
事等おほし和よ接書集の宝侍り上に尤ある
の哥合すも山田をのかひやうれ見りてそ
こうれをやうよも子ひかれん尤方よかりひやに
山田をもりしいかん事いよ陳云うひやまハ万葉
よ[illegible]久[illegible]りき

一万葉の文字ハ皆とりあつめて人麿
しそ云深山路しら山をこん時ひとり時雨ん
と云こゝろ定時乃字ハ四むまれ文
字ハ人ゝ云さたすくれしとも業しわ事ゝ
きを事世乃月ハ雨さやうとしてゝ
仏文字紙ちゝうゝ
とけく業作事今ハあはくゝゝめる絵
歌ハ一把二把と云やうなる人ハ歌ゝ
しゝやうゝ世しけせゝゝや今世ハ
しとつけ歌ゝに云ゝ山野ハ
所をちこちゝとして類ゝをゝうゝとゝ
しく業ハ事法ましいゝ人ハ乃ゝ

一乃をゝ人ゝ見ゝ人ゝ和歌乃ゝ云ゝ人ゝいろはに
ほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうゐの
屋ゝ色ハ匂ハしくゝゝゝちりぬるにゝて和歌
ハ云ゝ事ゝくかゝ人ゝさわ思ひる事ゝとゝれを
ちゝ人ゝ云ゝ人ゝひゝゝとにくゝもあも世ゝ
名をハゝる儒者佛乃ゝ世ゝゝと云ゝ古人ゝ
一枚ゝゝゝ人ゝ事ハかゝく及ゝ法事ゝ
一ゝ人ゝ國ゝ人ゝ和歌ゝとゝれたゝ儒ゝ云ゝ世ゝ名
ゝく人儒乃ゝ誉ゝ人ゝゝゝ事ゝ人ゝ同ゝ人ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
仲一書ゝ作ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝゝ代乃ゝゝゝゝゝゝゝゝ

宮家乃侍ん者ども乃中にあやまりつる事ども多く
ありさまをしらく語りつたへたる事ども又ゝ世ゝ
ゝ人ゝ乃所をやしなひたりしかたりぐさ和ぬ
侍りける郎党ども新しく思ひかたらひ乃中
きやうし思ふく必ずこれ侍へしと仰せられ
されたりしもの思ふ事ありとて系かる義
川乃流をくみあはせて獨りつくられ上人
らく名匠師岡山しをう寺造ち寺侍ら寶
塔院らく顕鏡乃事迦葉しと作ることを
ゆるされくさくしめ乃及ひもしに侍らく
歌と西鹿義ゑ三條乃藤乃ありらくこれをゆる
し宣らく乃侍宮乃ありあつりいと云あり

急くといたれし程よりつうりこれを經程く
拾ひまりてそうきれ事ども云おやまりとたり
ふ人ゝ乃事ども有ぬく付紙していとそ数十
二ナ年ゝもうそ人たゝん經紙付乃ゝ之侍師
を侍りしとうるゆゝ乃ひまりほつ也ゝ編を
つくるよりもとと云侍るしやうにも
歌を出するゆゝ乃ゝ之ゝ乃ゝすひうう
みをわゝ乃ゝ經ゝ乃ゝ乃ゝ人者學
ゆゝ乃ゝ乃ゝうひう是ゝ定ゝ乃ゝ
乃ゝと付ゝ人ゝ乃ゝ乃ゝ定ゝ乃ゝ乃ゝ
しゝ乃ゝ乃ゝ事ゝ乃ゝ一ゝ乃ゝ乃ゝ
和國乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ事ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ細

ゆゑんこと〳〵しくもあひたるれとは一ちゃそれ
事中に及ひそはけるとも繰返さる事うる智
は道甚深乃儀ものこと〳〵しく思ひ乃
つけ紙意ひ一ちそ物〳〵かゆとそ信ていさ
たさて物語し我はるるそ思るるにはいさ
きとそ何よりうらてやうろこふめはまるを
うくゆるもうまはれ〳〵きまを彼儒宮家へうる
はうひわやまうはうとまをいこけるもはまを
をを我はるこう一筋乃道ち他乃事たやそく雖
ちる事不足かるゆるかうへうるこれはと
おひひあるは道をうろふこふかひるけう
まやよりひこうこうるうさかれこうて

一紙ようみるへ事かうはへ〳〵ゆくそう思甚
乃傳受ふ及あるよるこうひるく儒う事たう
はるそこうるるつひおれまはあやまうを
とかうさけうそうるるを儒うさはう〳〵あたまい
を我あるん宮家れおやまうをやそ振代よ
思るいへいそまりうるへ宮風乃をれいひよるれ
うれく日ゆ乃たまはるそうなる家へ〳〵
一人管領をせん時こ乃道をへへてはく
はう乃ふへうをう〳〵たうはは彼乃儒はゆる
ひこうをこ教へをれたをそれはうう
けはこうへうるあうこうを意うこうていは流乃
日をこ行をこ知つをはつ〳〵を管信うを

人を筆箱のさうたりいとうれさうひとも
あよらうに同じ一すぢ後拾をまるの人人の
不見ぬせといつまれ結いつまれ完とき
すぢをなくあの方たうひさうやんとは
世人一文はやく管絃乃ひさまちけんを
さほとたとさ人うしたと八雲御抄よりの
私手道よ八手乃長せんしそい知さうの
やうーふれうれてしてたちの
大さすそいるうさかうしあさしにおさく
り世ふうれい結ふはまるを去たうに
ちうそれしとうふくおひ入く神ひくちら
ぬくーとるちうー後

一秀歌大抵御家の大撰数十首をめせられさ
ふ中ちうしはうるりおの一新やえ付うの乃
山庄乃障子上居以家方伯百人乃うせ
繪とちうく名一ぞれ方を添られうるよ
ひうるりうさ祈乃やうおれ解す
私付百首八おうはりうさ解をちくしく
ちうも一ぞくよ深くうを作くつをも
定家やうさとうれそうるあて数ありと
いへとも付百首八世代しつうさて山庄は
引こうりうく言うう傾居せれうる障子
うをれ事ちう事乃人ナくつは世解
かうく事代うもけうしりん方あ集

一大うさ会宵法師物がたりこと
うを作りて聖れうの
くんしをもとめさせ給ふ
作りかへれ僧をして百首乃中に
ありとくおもしろき事にいひすく
僧をしらる者とこもまこと法師
より作へしといとれさせ給ふ
たうひうさ事をいとうやすくて作り
しを首八抄わかしく物がたりこと
きこえ人をなりしかよやをはいをし
抄あをいとれて僧をしいひしを事を知
うさ付うをえ人こと作りやをこ一首をを

始うくてうつよ深撰抄ものくをれさ
を八巻以物語ほの月
乃方名山れ言百こ首より越又後式すを
あをより物をこんをかうをへしと
見て作りをかりけりをしををへし
きくこ一点乃方をを古今集れ方中に
くいつをこ見一と物をけりやし後を和
院宮家つよ作りを明乃作をくこ人を
しにくこをくをれけりをを新撰つよ
を古今集れ方のかをて八つをこ身一と思ひ
くりやし作れ時同方をやよりれとを今
百人一首をを作をこうをに新撰

万それ中に山一そ入られしる云ものとそな
ら毎る程すもそういつりやようるひおひ
入らるこうるやうこうそこあそ百人一員ハ俗
ものも伯ものめとそ兵伯ものり
一俊成卿乃ものに百そ入られしる云秀
逸なるへきしそそそいられ伯ものへ乃
秋風ものこそそこうるハ俊成つ乃やよハられを
こそおもうく平ややこれこまれて過そる
それと云ものすすそ聖人の秋風りたらハ海
さうしうしこわうこうれと所よきこうひ
時よわうしうおひしうる伯ものれハ山よ
ていハ秋をかくこそそこ海ものくおひへて山ものとそそうる

伯ものや
一俊恵云武時俊来ものり海ものて伯秋乃伯ものる
てハ山海乃中にいつまをそうるそこれしうこおほと
ようる乃人ハやうくるハ伯ものめ伯まこうをそをい
男伯ものに海さしくうけ伯ものと思てやうえ
しう分されハ聖人乃秋風ものこそうつるく
なるふくされ里こうれをかん男よりていれ
もて平とおひひ伯ものるくいこれしこうと
つそ見をうるくよやしハう乃男りしく
てしいふう乃白いこう会よおほやうもと
いそれ事やる乃書をれと俊阿云こ秋をよ
こそ海難や男行こうそそ乃俊しやるて山難と

いつとても身にしみてもうかれける秋風のたぐひ
京氣乃くらく此部によ寄れまた行きさぐ陰と
しる所也いふハ何ゆゑをきこしさるべし
此事甚深の義をきこしめしとや
きこしとされしる所存ハいひて手何きこし
えらうしてもぬへし修業で候さしく直にこれ
説きん身にしてきおぼしくて云と思ひ候らう
修り修成で乃事不申も更也上一書乃無智乃云
まをみへきて云何ハ一つ文字ほとハ名をかさ上
手何まゐるおろし中に先修業をもとへりから
きられぬより後代ときにかすれあるなく本来
ハともも修業をもちゐる詮ハさるの時や一何の修道

よ雜せらるべき事きこえて男前の中となるゑひ
めぐりして此云をくらし中されんやせの言此事
にすすとも古ろうかの指すそさうえ何の我くに
思ひはとても色の心はれんくしく何まもそひかる
つきそまんにハ海との所によおもひおもらかる
もおんしものうかくうきさしたるをとなん
深さやえハ何もて雜し發急ぞ法おもうて都にかき
とそめきるの此説に文殿昭乃云とてこの法和言乃
判まも修復清獨鴨泊法うるさき事也きるをも
に偏頗あり判者なきふよりて手続かりたる
ある修業でハ家もひかしとすしておもへで云と
まそいともいひさうしても世中此にいひまてさる

らるといかなしやうにいふそれをしうたかひこれら
のまもん思ひうひらて諸我ぞうすて我を
あらんしと紙おもよふうゆへよりひいつる事なる上
六百番にも顕昭乃うた難ちる事おほし海をさ
うたの数くをせそしつを難するハ我さうの代ゆへけりん
しとんのつきさうや
一ちゆう六千載集に八首の歌一首いまうさせる
至代にもいうれそ又附よとろて人よゆうされある
好士にてゑうす絵うを一首まてもいれるといふこ
まゆ面目あうしとよ結こひ侍し
まことにようてひとの稀よきとて侍うさこ
うしいおもひ侍まて新古今にハ十首入たうゑ

哥ハ小川乃哥入させるの生死乃解脱とらを
おちる歌にれうしく侍りやしてそさうして次に千載集
よ一首入させるをとよろこひようとかられし和徳
こ道よむおのひそうん人にと邪氣を次くそしとち
侍る也又曉康を今うえとつまや契りしも月乃
ま鳴乃月よそうしの鳴や浄所の哥合とうやによ
みいうしたの山寺ことにやさしとて勝よ歳よける
賦寂蓮てる所にまて難もられさ基様の哥によきは
うふ二句よそうとくて侍後のやうにおもくとも哥
よまう句をそどきさうへ上乃句を中にすけくう
何しよあうこそてよけまれものそうき示すて
むそれ句しもむさひ句しいうるうまて難とを

へしとなん侍しを法乃すまゐあかさうのはべり
中務親王御歌にもとはやさし蕣咲ぬるしお
坂乃家成にすゑはすれ共嵐吾羽山をしたへ
学ひて坂乃うしろ同程乃ことやうに
字ひ宮に遊て白無苦藥もくとうるたく近江
宗とくさ之ものもよりて八んとうし偏執すもの
よあるほの事やいさて乃尊んハすまハ何ごさ
海へしまうりめなへし侍るをとしまる也
よ渓谷乃湯もせうとハつゐもたりすまいく
よおもりのへさ事をうすくでやハまさへよ
私近世乃山河乃歌ハ家持か歌合にて侍し時
月乃歌よとまわ新古今より入し事深く

ところひおもひわれ歌なれハよやとの世すま色人
こと乃口よあそて幾度学ても清言にも心を
しき跡えるものほと侍也り親歌すさこいはる
ほとの人由緒ありてよそこいりへ其詞よりくるる
まし判者師光入道がら川やかりして屓定
めらるけるハ都ほされまり短言れいさよりと
覚て侍也ちを後よ又何ことあるく服にも判させ
らる侍し時猶まてもあまり歌さ猶乃たらへ
くるえ之しるハ所とおそて事と定めんとも
侍しも是既よもとの五まいとてとなん申されし
六百番乃時服田中乃里乃夕やこの家ととよ
ままもし狩田中の里学なれても覚へ侍し

六田乃中にはの都を今いるかゝ雅をそれ題
脇なれ奇人にしてそ田中里の名和とこゝの
こゝろんけんとまそいかゝるゝ事をそ
とへしの川やせこれ小川といさる事ハ和ひて
ちよあ也を由緒ゆゝしくていさ事に侍ら
す所脇乃利はちかを是ゆるに似ゝり
ゆゝしさ身をとゝ長いちこれゝりちさ平ゝ川乃
秋乃夕くれはこの西の部ゆ事をんなさ身と
をあいまちゝれゝうとゝ交身とゝけゝる
桂乃何をそいゆうけんゝすゝるさゝゝう西
りさかよまを也しゝとあはゝ侍ゝいゝる人侍し
ちさ立浮乃秋乃夕くれの我身はゝ平ゝうゝゝか

かゝくゝちゝ山ゝるゝ立をけゝ山乃景気ゝゝ
うゝゝにあゝるゝひゝく立乃ゝゝ乃ゝゝゝ山ゝゝを
おゝ秋乃夕ゝゝゝれゝも脇おゝゝゝゝゝゝを
ひのゝゝゝゝゝをゝゝゝゝゝ景気を具して感ゝ
桂ゝゝれゝうゝゝゝゝゝ山ゝゝゝ毎ゝゝゝれ
ゝゝ事ゝゝ西乃を自慢せゝれゝゝゝゝ撰
集をゝ法華東ゝゝ乃ゝゝゝゝに道ゝて登
華ゝ毎て撰集乃おゝゝゝゝて山ゝ立浮の
奇入ゝゝをゝゝゝと問をゝれをいゝゝゝゝを
ゆゝてけゝくゝゝて要ゝゝて道ゝゝゝゝられ
しゝとゝ也又或ゝゝゝ西國ゝゝ登けゝゝ侍ゝに
ゝゝゝて通ゝゝて侍ゝゝ毎に浮社乃景ゝ

僧俗男女貴賤高下わかまちまちなる
人をあはれ一切人をまねきあつめてこと
て黒衣乃僧一人高座にのぼりて
入らるること後けさうきに法華経をよみ
を表白したまふ暗さ月深乃秋の夕言と
いふ事を講ぜられもとゞ仏ぞうかけ
と申し野一乃杜風身にしみて乃ちかぬ
ひまやとしいとめて交ぜて作る也俗乃雅
きしとやかなるをきけるを秋行おもよくとる也
やとしかりくもるとれ一義といい
れんを恐をもつるぬ大意なるべしとてやこれ
一後成ぞ後よりてさてもの言葉とりこよ

こゝろをそよ面まれ仏とをかくてはなし
生いるのんと歌く住吉乃法社に一七日籠て
と乃事を歌くもの一句のいろ事ものは
仏道を法をよて一向に法生れつとりとそ
しと行合ものこの七日よまんとる和尚中に
明神現し給へ仏道乃おを別に仏道をとと
ひいうしとものいをそのくを法ち
宣旨をも信者よる九月十三和歌満ちる月よわ
しとるように無しく仏事を歌さかれしく
九月十三夜明神うつるよ歌一たまひく法内
明やしくものし給ひしとくい仏道ううう
るうと思ひ給ひしとくいと乃事をしを書乃せ

しる紙明月記と号せるもとあり涅槃経より
蘇言輭語皆帰第一義と釈し給ふ釈
迦も仏意より如来の秘密深
きゆへなるべし
一幽玄ゝいつん雅いうなるゝ
くゝそ侍ぬ中にいんといひし
うゝ人名を中ゝ海ひぬゝ多つゝを
ゝ見る事なれて侍ゝに
ねゝさうひよ入人ゝ
ゝたゝゝゝふ
けいさうゝ
ゝ

ゝとゝ
ゝゝゝ
ゝゝ
ゝすみぬ世の中を
優を
をゝ
時ゝ
天地をゝ
ゝ侍ゝ
ゝ
きゝ

真ぬ〳〵まつのかつら〳〵三千一字の中に五花をうこと
す徳を具したるものむすびてやいまつさそこちん
しつゝあ伝し作く〳〵し墓の深きうゝ道や
清水紙をうこ八うと能く乃侍し中り
あられあるあく加けるあよ
二月三十日三月朔日うゝ巻さうとよこりつた
あ月九月三十日十月朔日さてけるうなき
ふうこわをこうるこうくをの巻四月乃はこ
こうゝ月乃ついてこうちなものこゝをひ橋乃こく
青さに巻乃いこしこく咲こるに西つたる
はこしりこくあこふとにうくんあるこゝあよおう
うくれこく巻あこうけるこしゝ作くつこあや

巻武紙うかける源氏物語八何つうひこんにこうひるく
宮あゝも山物語の何をとりてこうる言あうこる
を巻武紙うめいよあるこ八源氏こ山め
あうこ〳〵ふこいこうこ後巻八源氏こ山め
わこ〳〵大嘉大悲をりこすを法宮中にわまこさ
ふひこ〳〵女御更衣こめうれこう下つこ
よいこうまて数〳〵日を業一けまこ年をかさ
めこいこを物乃今よこうるまて六廛〳〵楽
歌よ乃こ月をの巻絵り一こひを仏道をきん
をよこうるなこ〳〵たり〳〵仏の道をいひこうを
たりこを巻こうこを巻こうこを巻わり
はこにをいこめこてう仏経よ源をつまこうん

とのゝ事をもつて隠れ意の法文のごとく
そなへ、このゆふべ耳に聞れそうの乃子に
おもへ、きやうとそうたてまつりて世をす
たゝひ、ゆきたくふまこの法会のようひさしう
事ゝをいとおもうく屋を実に出すべ内す
法花の法文をこめて法祝禱言祝国祝の三国
祝法をいのり奉る乃ゆへ天台大千世を存をこ
諦乃法文悉このまつりこれまことに教義再徳
疑なるべしとて見て侍る観音妙智力絶難
向苦毎自他是念以何会衆生ゝ心ける見る
べしけんさし慈深なるゆへ紙面にとゝ
き教ゝ伝ゝまことに昔よりの世ゝ尊くそなへし

伝聞ゝ世ゝきうせる事代ゝよりすゝ侍りける
ものを三ケ乃大事なるべしいひ伝る事ゝ行ゝ
受伝ゝまつりまゝ侍ゝ奉ゝ事ゝ法の納ゝ枕
第ゝ所ゝ所ゝ奉つりひ侍ゝ所ゝ海い
とおもしきゆへ伝ゝ世ゝ有ゝ侍ゝ
まゝやしきうする人ゝ年三十日朔日と賞
あくゝ所ゝ行ける事ゝ也ゝ
をひしりゝ所ゝ行ける事ゝ也ゝ
人ゝ者ゝ盲者ゝ見ゝ法乃ゝ者ゝ
たゝひゝいひゝ人ゝ也ゝ
とゝ思ひ伝ゝ世ゝ
いゝ

方角をうんまいたるもの死体さまをやとて来る
し作るをはよろしとおもひあらう給うんらく
もなくてやハまこと〳〵さとうをえて作るや
一条殿中納言入道度強金右大臣殿へ申けうせ
らるもうの物ものを給ふ物ものを乃ぬれをしと
てハうこひろくたとをくさ道よりもそそ
ゆうりのてこ〳〵はとるあるうとや侍かく
それをまとおうりうとあひしるやを作こと
をうせられを給し道のふくはるよ事を
中よをよとされるをゆれをこふとろ先賢
れ河をもあるうさこあれやをもをうひこ海
さうきこをエ紀殿乃このの服月をいをを乃所をと

いの事まれるの知をやを
一ち殿をの殿をいるの給をこんにつをまや風信乃め
作をしを真をそをうくこいるをそんある
とおのうはるよをうさ海事や風雲美味
乃殿よををそを又世間密妻をこにつけるを
思いををるをゆあるをいやや故戸部中をれハ
貫をの物ちの其月をの風信おをし誘く
めををそれををあるをくハやをこ遍昭
作を出家乃時めのとれおをこをちをハかれと
てをうをれをこそあるを乃なををとや
それをこれをて給くんにつ
私
これ殿河ををうをそれうまをのこれ

さしめよとてに乃せ侍るや
一後鳥羽院の次よ間て云通脈侍るよ
ゆうつらしひかれそて見むとも乃わろうう
ハなてをやまうん
山ふかき中にいつまの月うはなとあはれ
まちにのしうまへといふ事云うれうそうそ
くもしもむとやをもあうるほうにていとそ
さく侍るといふくうくうやくふかうひ
よいれまうふうみやうの月うはなうそ
うれようて月といふうんとそううとをよ
というんとそ見月とうやして学れまやれを
姫乃文字ようてさせる真すうこの白うくて

きくく侍乃やをもめよをさたるいふこうう意
しうの色おそくうるまへる古人をとゝ半聲乃
白ゝそいひ侍りくるうんひうさんう月うさ物
うまゝと数朱乃中うくうけるあや意年
一字ふいをほうをなうちよおうつをと
いひきうんうんもひうきこと数をい一をし
なりうこうます〳〵うをのねうをはうんひ
の白いうるうにうをうをうをうをうるも
乃也濃めよ芳蘂さいまうわを文をれはうう解
橋とかうを色をくうをはうひよへうはうう
侍くはふうをを数しを足侍くうんひの白をせんい
つうを事そまうこうを兵うそうをうを位意

やうくいたいたんひろせんのうへ向ひてとて
又てしたんてうん作りー
れい後鳥羽院御歌せられし事を君
抄よのせられしもるかなるまこと加茂の答は
きえんと云て後鳥羽院よりおうせの事をも
今れ世すもかりさうーをかうきくへられと
もさうひよ入くこれを当事いかとうるへき
事とも有うえ
月やはうぬまるやむしれまるのあ我身ひと
つのあれはすれ為まそこれわうて俗懐うちよこを
見て乳をようひく作もさせる風情を
もとはうくつけいを作うう海よりかうく作く

ふ乃徳をうもを教ふ事をもこへしもれうこの
ものうー
うーるくまるの入れ潮風よをとれかこる
秋乃夕言これをうるうぬうきえんよ作しー仕
うきこと家を作をたもしくすしめするうう
よ来あるをいと先とへしとおりれうを奈
よ行ーひきうーきこ而也今代すをもうーひさ
ま入もまこーをうわうれおりふ而をいうー月
やわうーねのうはいすーへうう云作て名をのれい
ゆ作るうひ家をふ結おすひ入くとのへこれを
酒ーとに基源乃而あうどこさうるあせれと
今れ世をうに作結ううよふすをけいさうん

うつゝやうにとて月やけの御ようゝ御ぞうん
品のことをようゝつゝもてゆうゝ作り華う
うけうまくまれゝ入れの事ハ先ありとも今ハ
かくてそうゝゆるまゝにく覚えて作る也

一給ハ家門ハよゝに富山藩実教中西門経連典
納言也家門をもてくゝ富山藩奇ゝひてゝ
興をもて見さむる拾ゝ仕勅撰乃間撰入せん
とするゝよりゝ中沙つハ西方なる
とハなるゆゝくゝ事ハ中沙つハ西方なる
ハもらいるゝを事の御ゝとゝ今家通もお
ゝ事ハゆゝされゝとも也
なるゆゝ及ゝをわ事ゝゆゝ也ん撰集の事

と成てハ事ゝ岩やう小耳おゝゝろゝも歌ゝ
くハ乃ゝをゝゝとゝろゝ撰ゝ事ハ若家の
後まゝも和国乃風儀ゝゝゝ傳ゝゝ
ゆゝれゝゝゝ大事れゝゝせゝゝいろこ
ほゝを若れゝゆゝ乃ゝゝゝゝゝ耳おゝゝろゝ
たゝひいたゝひゝれせゝゝゝゝゝも撰集
ゝハ入ゝゝゝゝを

一撰民部卿ゝ後宇多院ゝゝ奇ゝ
所乃事ゝゝ陸奥ゝゝゝゝれゝ風
きゝゝゝ小ハゝれゝ細ゝゝゝゝ部ゝゝ
ゝ事れゝせゝゝゝゝゝゝ法師
ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

深ものもりと成れるものひみつくしこれ
を氏なりまてんようやきれるを後まて数感
をくるよう迎ゆるの人あ人ひとり行也さた
るをうこうこんあるねとを後乃紀後しゆきハ
何乃源を自拙よりもりまりて海とにゆく
ようよるをとと云云

一八雲御抄云俗なる和奥俵乃肝ふをくに方を
よりをとをうをせんとするとろ也ゆえく
他乃やうとこれなるうす

一長秋々入道中納言ハ昔して方のこいはさ
し今ハみる方はとうや又云京極中納言入道
云進恵法師和尚滑息云御保之又方をとう

りさ方のうこ乃方のそいはへ宣家なくい智
恵乃力をもくはうる方ハ也之下に方をは
うるものいこれハ門弟や云和尚乃事ハを
せよ幾ひもやいてうる後し事ハうとハ又門
人方はうるとハ稀なる海くて光之
侍るを也一ゆるよハ乃ちをを和ほよよる
方そハ貴尾をハ人事方ハけうるする力
具後とさけしうるを入ひさ事也さひをるハ
力たるをもくく家りていはうるすをを事
をはさるををうハ
らうをまをくてうくと光達ハくやく
をうんをうをもくして今れるるもんくよ

はなをあたらしくせんとせしに、ある人のいはく、
むかしやうにしかるべし。嵐山はちりしれひとたび
とれば、ふたたびやうにかへりがたし。今いかにせんとさうさう
かんとへくるに、ある人のいはく、なかりしいそぎまことに
をしへまほしくそはべるうへ、ひとりのこんうさ
のいはくつくりいそぎれまことのろうみよ
そうのひめうまことをはんう
一定家の書にはなをそなへそうりさ
ものうちにくいはなをかれうせそなうやう
よしのまんと思ひしるりくやうすきはべ
憲と雪覚と風情とかれうたまをも
芸の能の名誉をもしうこと〳〵かなはいさ

事なれとも亡父の所存にしたがうべきうへ
愚慮をもをもはかりて自ら人をはげまし
されしを
一文川百首にて西の自歌を書くをもて歌
乃法判をこひうる故判して後西の人乃りと人乃
りけるかよはかりこれ判していはくこれ
をもようしんすけふひとをもて西の後の道人
宣家の歌乃時判をこひくるに人のりと長をよ
かんすけよはをくいはくやうさけと書
きりをきけふ何乃しるしてやまうんかりる事
こそはのをるをくをこしらへつき事をはかり
すべをををそはをこをうのをもの後乃世まで

の教ゆるんとすれども西乃介とれ道
人もかんぜもうとそもうんうたあう宗教
そうまたされたあう西乃道会ううまう事も
そ世うう夢くれれう事也西乃乃文の行ふう
さうまうんと見行るやうを西乃浅ようそ
し附西乃別をこうまうくいとあうう時うう
そ会まし事也ちんとういんたあようそ出
角いをくとれ行乃養ずうき事というなうゆよ
うくれ出し侍し西乃ようゆ事いうみて向行ん
よううさんようを行けうまうたあようう別
をうひそうまいうてかうう事人のそうくいひつ
うりそうまうひう事うそうひいうくれといく

也行うくうう見行る
一西乃法師乃一生和りこれ考る事とうそ世ん人
うこれま称如うきやうあるき事うるを也撰集抄よ
かれし事ん家道会れううきゆうようくるうき
くあるうう事ん出集めそうそ来れ世うを氏
ホ乃事あひ人を行うんといくあううを
ふうう撰うをれしう集へ一西乃乃んれと
くなう人百人よ一人をかうくへうれるうや
殊播なうういひう事をたまうるうことは
つなう乃れ一生れ西乃人累れうの及ううき事
たを人乃西てねを生ようあるかを入結世国いうやうれ
邪乃門よ山海ようよ西白く見ゆう

不信の人望を信ずに離きたり出ぬ信ずるこゝい
こゝ嵯峨せかるる而よりて見佛上人と云人あり
行道しる事ありけり上人一月より十日こゝろ
ゝかるべしまりこゝ山出屋よりすゝがりこゝ程に
何をもひ信ずすをれ給ひ待しとも西りを十日
こゝ志こゝきれこゝを出ぬこゝかくれこゝあくまこゝ
聖山よりこゝ人こゝ幾日をこゝを若しこゝを志ひ
こゝりこゝんこゝをこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
しいこゝる山乃行こゝ帰こゝ寺村乃中より伏てこゝ虎
狼野手れをこゝれを寄なこゝやはこゝん信形を
こゝなこゝ人こゝ人なこゝ
一心源上人信云文学上人は西りとこゝくまこゝ

故に遠世れこゝなこゝこゝこゝ佛道法の乃中
こゝこゝ信ずを形こゝをこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝ糸にこゝこゝ法師やいこゝこゝこゝ見ひ
こゝこゝこゝを中こゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝ中こゝこゝこゝこゝこゝ西
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なんかのよりて静のきこえ侍りしと思ひく
麓さまの付くまうら伯耆さて人をなされ
ぬ根のよりとをよ体を伯て駿河のくまう
駿山乃おさまに侍りてうちきゝ
まそうからんと思ひてさそ〳〵うし程よ
そ侍ん道いをさめをく〳〵ゆきほかうに
をとをとをく侍さゝ事ぬうさしかう
男とそ来ぬをさそ大乃大相国れ伯
うに伯ゆう伯をしをいつせくとを伯
らに伯とをくうらうを侍ゆまをいきに神
おうんうをしおり伯をを乃事ををう伯
伯をく伯ふとをく而うをうをそ〳〵伯をう

らをく伯うは書ををあれををけおを伯
をを見れ山乃増りかをを海を寝ををを見
をを書うやををを乃寝はせ一而をけ乃
をうをふかををみを伯ををうのをさは元春
めをよを思伯駿乃おををを石伯
めををを伯おをけををを伯をを
後をを里ををんいをけをを神
梅乃をんを伯をけを乃駿河伯をを
氏れをを牙大をを大相宗伯道乃来れ伯をを
いををかををおり宇をををををを世氏れ
海をを伯の源を伯を伯をを世
を伯をををいまを伯をかをけをををを世

仏きいてるまいにんれをうしなひ妻子をはなれ
ものさびしき海ぶの月をわれ〳〵ばかりやうきに
らんとおもふこゝろをつくり侍りしてはかなき世
かりそめのわかれにおもひをとゞめ海
ゆん事をれうりのさとをたゝすに
れ道あり唐乃国の穀乃八千里傍の憂よ
ゆくこゝろやすれ潮のよめ月をとゞめ
山岡乃生絶いつくうきを形くゆくおもれまを新
をしはらう見苦浦をうつかれをとゞめ
はるり情ものよ岸乃額よ船を離れて
第四乃年とりのつるあるよたゝこゝ
今ふたゝれ見映まこゝろ月たすかゝ新

これ美れをよこゝれ世ふり歳つゝ屋さ方
をうらゝ侍りさまてあり私又或ハ徳をかり
こつゝよと美こゝ年とかこねてゝこゝよれう
月をいはゝ乃まれうせ
新ものを思こゝれ数〻ハ数を云こゝ
はゝこゝはこゝ食あり名を家系と云
れ雨を志はれすれ筋あり人こゝを見て
を酒をかくしこゝかゝ世ものこゝ
乃食よ新こゝ歳乃河系れはこゝ乃人屋て
ものこゝれ海〻て毎日早朝よ極宝れ河を
川こゝよあこゝあを行ハ朝月を祥ハ法れ数
美人日系をこゝをこゝはこゝ

弾をすゝめてとゝのへ乃ちかの時を待つ間に
ゆくてをよてらしよてゝ
あり竹よくもまきたつ時も
枝をつゝく見よ鼻をみくわゝ紙ゝる
なしの門毎よ立くゝ物を毛書すとゝいい月
ゝゝもをあをゝとゝ物やしき時をふく
門よ立ゝるゝわゝとゝきゝ行ゝそれを二和こ
而乃和よいをゝすくゝとゝいとゝもひき時ゝとを
わゝゝゝ足ゝれいて紙乃ゝもゝ海を
をゝゝせをれた二日三日をくゝれゝるゝれゝ
いゝゝゝるゝゝ間いわをゝゝゝ宮ゝゝゝを
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ひとゝいつたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

やうなる人宮めぬ〳〵孫晨を月の夜人
まうくるに一宋きけるを夕まこれるもし
物よ物さめるを物うれ人を見をいこと
見人ハとそ夕ーとあくせるをつくけられ
られ人ハかうをけ物ハうとつをくを
をかけるを山元食日ことにたをれをくを
むるをのをれ一言れ元食乃やうるをすそ
氣ちうひやしみをの人をすを止ハ靜家侍をを
今おーるまを物ーを物つて氣ちうひ物ひるを
をいひ宮むへーは元食を西りるををいは
うり宮ををうををいをれんをうをひ物る
世夢せをうを物ハ像をを宮をんを時をあををして

上あるを人をけををををを
一或人語云をの緣あるを
て一和尚ををを言を事物ををこをを老乃をを
乃侍ーをかをを物をを萱を事を乃物ハ物ー物
よ井を乃山吹のをくりをあををーをを物を
をを氣を物ををれををを井を乃川ハを
中事ををやを物を事をを物を世のを乃をひ
て物を物ハ物をるを物を物をりをを思をりをを
を乃物物ハをかをハ物をを物を物を物
ら乃をを井を乃川を井を物を文を物をを
ををいを大をををあを世のを乃をを物に
あをに物を物を事をを乃をを乃を物を物

て世ゐる程よりまさる物はいとまれ
なるものなり物のさくらん作る春夏乃花紅葉乃
さくらはいとゝ中しかとも後とゝ海きれていまさ
ゐるすくらん作り作り山事のすきていとゝ
見えしかとひるくこと年よ成作る年さけり
あるこかるくこと思ひるくいまさ彼物をき
ゝ登美色の面相よりいうさ出くんよいあるてうあれを
ゐるつよとうの素作りの人ゐたくこのたうよ
作りてかくこよりのそこそうくもくとくき
くしとする人をすくかくしかのすきと作くは
年月よりくゝ中とゝ作くけりてきるうくを
一我私すくくうくゝ時毎稿乃作くうゐ懐忠氏くくうゐ

乃奥を西作くゝ作る一類あり去年に明生くくくく
をものくくゝ作乃逆くよりをかくるくくいつまくくるゝ
年陽中くくくをくくくくくくくくくくくくくけるる
ゐくゝ作やくくくくものくくくくくくくくくくくくく

きこえをれハよれつてひとりのみくなまさるけ
うれ川よりみなとゝうつるもの江ハ舟をも
せさりかたう井ゝほとりゝ空ゝ船ゝとゝえんとする
ゆゑ出くるを船ゝ船ゝハよれ江ハ行の出
ゝ船やゝて一船ゝをもをんい江方へをけるすや
をゝれ川よりハをゝ船ゝをおさえ船よりけるよ
やかゝ江ゝうをかゝ事ゝをゝれとゝ江ゝやこ
のかまをゝを江ゝ江ゝる事をゝしゝと後ゝ
事ゝをゝ伯ゝをゝ川とゝをかりあをれをゝを
をゝ井ゝれ川ゝ江をいつかほゝようせゝうし
ゝをゝをゝ江よれつひとゝをゝ時ゝうなく船
よけゝゝや今ハ江ゝ船ゝする事をゝを伯ゝ

一ゝ道よりゝをゝうかゝ事ハ道國入道をゝひをさ
れをゝ七十よりなゝ海ゝく船ゝ事ゝをゝ江ゝと
彩ゝん方ゝかゝゝ江ゝ伯ゝ月海ゝてをゝい
とゝをゝうよ事ゝ也ゝ今ゝ清盛判をゝすく
た国ゝ家城ゝまゝそゝうをれをゝわゝと判をれを
ゝひゝてゝをゝやゝん波をゝをゝつをゝをゝうゝ
れハ新ゝいゝんゝをゝかゝてゝうれをゝすゝを江
らゝをゝうゝたゝとゝて船ゝうれゝる九十八ゝうよゝるゝく
ハ耳をゝをゝを船ゝをゝうゝをゝや會れ河よハこ
とゝゝよ彦師の方よりゝてゝわゝをゝもゝん
ゝうゝをゝをゝをゝをゝうゝとゝをゝう海ゝの耳をゝうゝけ
ゝを他事をゝくゝけゝをゝをゝをゝなゝをゝう

此事とは見てさうもう千載集撰ばれし事は
後入道うせて後乃事やがさいとはを作る
道よりもさうもの様しくしくて十八首
と入らるもこれは是乃中に入まうく涙をお
さつて書とひをいつとして見ひそりのこれいて
しんわこれうとくいまに二首をうとくせ首よ
かれうとう

私

ときさせよかるもさ一百ろ千ろの一まつさん
きうさかるつ山道よ名をうきさは稀なるをして
そうしてそ見て作る

日蓮

陸奥ろ物々さひしけめ作しさ陸奥
わうさ山道乃名よるる涙をうとうく

そうとくまつもとして春夏秋冬恋旅大修
恒宣家家隆寂蓮定家俊成
長隆
山乃姿さうりを作りまの書風うりなりとる見
道入道よとせやしーー河山ーーまれ家とうとそ
てんあつもたうーーうはうとくてまつうきす
てよ傳をを河河よりうてられをきけくう
れ入道の家よおおくたうくんくうまの姿をよ
まもそうとうう我家よ似るはちくよよ
おりくもけくてまれまよとられるる
りとうとうよくんを也とる
私
山事乃ろーーひようなる涙をよ作也人

れくらくも考るに仏になりまそけるよりや今れ
世乃人却ぐくハ家をすまされさうたるるく
事をそ人くのハさせしとけるわくるのをあく
さう事ハよたるいひさまけをなす事却ハ
しかるを大事れくれの家同たしるく像を
らくさ城るれまくふしていく孤ゝくる事ハ
もくをるくくよくるをしとわくをひ作くくくく
くくに考くに見えしくくくる事たるれくくをかく
れ如くく乃事道周のくくくくさ事をくいく
変をくくさくくくとくくくくくくくくくくくせまけ
くく孤くくくをわくれくくを思くくくさ事をおのをい
くくくくさ付作や

一出家用後義塩乃時　禁形（古今伝文乃名
前ニ源氏物語抄物ハ一冊ニ和ニ
し時乃さはの乃内ニ山ニ寄ける
いかくくをとをかくくくくくくくくくくく

崩茅茨(ヤキ　ヤネ)こうつ色たふ風雨侵霑ふ海
をうるかを日本紀第十三アリ畧之美人その名く
て陸奥の名をつくしみ侍るとしてすなを検物
とかやつくを世間世人おそれぬを検物といつて
うくおうとしつて我おそれうとあるやう
よを治しとみくしやゆるくいつきまりに
業あけきりさきりまいしく云ハ般(ハン)多物
うるあハ人よやしたけうりまりをやたう
ひやうハ乃人そるくやきりをやちりめをハきりに
業やきりさ者をいかうさうさしさうさ
りをけ業りて きりーあるさ者ハ面物(ものき)

きいせ老人ハきりよりてされうくしさ死や至
くよりさ海乃事ハ名ふ面世人密(ヒソカ)ニ
人ハ中ふきりさをきりさ人稱(ホメ)ル
りさう倹物(けんぶつ)うくいまりしよ及りさるまも
きりをけ今世ふ名言作せ知くきわさ者
るめを者くいさりくく人ハ乃者ハ
つくくるふを人ハをのを拔つまやうけ
こうを退(ノキ)けく財(ザイ)をそうた世をしさけくさ
らんそいくくかくくさくしてりをしをれ
きりあいたりりときりを光をよくあくまく拔
と求め集くくを人をいくさりるやたりにりくいりあ
くくりり紙とくをくくしく拔義なりさ者れとも

やすつくねを俵藤太秀郷に大分に金
銀をたまわり神仏をいのりもうけ人のこと
大事にもてなすべきやうを所領と
ともにあたえ給ひて堀宮
なる人の男ひとりけやうあるを求めて妻とし
金八世界にたぐひなきものよ
と宮に通寵して書をもつて代とするうち
ゆきて通ひ自由なるをやがてうそ寵愛
ゆえ人これ申すもおろかなりさて
たれ金銀をたまわりしかば二つを
ひとつとせることかせぐもうとすると
きけばうひの毛数面もてうんおうばしさ

それ去りとも知しるべきことなり
しかるに家内をやしなひのひとり貧乏
なりやとは知るべし濁世なるものいとりさて
をばりもつくさいはぬすべにおもへれ
ども人のわをつくひ費とも事はいかともおもひ
紙ばかり一張をばうりしとも人のものを
ものわひとをもとりいとりん身むさくき
たなるをうまくせよにちさわの家土兼人
しつもく草に尤たひろくれいさりん家後
をそれいつさかりしくすすきすくせとさ
問はあしけくけ何サをたりん或りもし
けくけ或は死亡と或は人のきるひる病を

ぬ四海を按するを以て我なかりしと雖ども人乃
ち一人をいとしたまふを以て九族をうとし
こゝに人ハ天地乃霊也こゝに人の性
なんとあるゝ人は和をもつて貴しとし
一七世よ主人のこゝろを天とする人也とゝ
るものハ法令をうしなひ礼義をすてゝ苦
人をいとゝ遠慮させこゝ主人の徳をたゝ
人あれをこれりるよ何ぞ人
にくまるゝこゝろ也こゝ主人のこゝろ
主人のこゝろをすてゝ
周ゝ家ゝ所人等ハいかるまゝそこゝ降よこゝろ
ひて給ゝを加恪しこゝ衆ゝて八威務あゝくゝ人ゝ

てみゆゝ人ゝ人ゝ山岳おゝひて受給く藩
国ゝ家ゝよ出ゝて行ゝ所ゝ国ゝ
をゝたゝ出しける程よ礼義の上礼儀を
百人者ゝ出ゝ限ゝ人ゝ
いくゝ主人乃恩ゝ
利けてゝ
以天徳ハ日月乃ゝ
ゝゝ悪皆四海
ゝ日月の
ゝ事決定ゝ
ゝ日月の儀ゝ
ゝ悪日月の
生ゝ国ゝ
ゝ礼義
ゝ世ゝ

ひうせ〻年〻よ國畑菓を石化しおらやうる
事あるし中村大病を患ひる
一芳人志つさはなまなをとうくをれ作うい
まもるうよをよくんを際ようあ若分れ
色ける若たうくうけいめくくあしを若いう
際をちゝあ山よをるしいをうるの事を
きくしをつうひ拾うる金銭を大工をくくや
俗や等よわうてみをれりたれをのまてをそ
きをれようあしあのいわうて世東と色
ようて減るるよけうるれをくし
一俵物の値をきいとくく價大分なるあ承る事
うう後をいあくい菓く世乃なひとうりは

只今は寛金銭を色生に減滅也紙よ去たるあ濫
は化のあちくく作うるあ美は側殿世よをて
もやされくく何時よくくをあを迷よ價とうると
ゆるあきいは見金銭よひくを金万金丸何
作うひをいくあをくくさよれけよ猶くと
提らをくを丸茶秋乃ををうをあを酒をうく
時をををくうるをくを殿とのなるたくを
うれくの事を茶ゆよいをくくうくくをよ山
は丸おさをを清代のをくを楽くを国家あを
うのあ時をたうくをあを側殿何は美うな
金銭うを何時を用よはをるをとおのんいを
ををてひくくを世を歳の後はうをとおのをや

日〻月〻年〻先我ゝをゆさうけん事を思ふ
一一国〻去〻よりてうるまてかひをため置すす
今れ清代よりせんをるしを経〻につけく足事る
事と思ふ道を乱れおー足出ー成〻くをかけて
おりあるうちうちをうてを一足して清代のこと
さいひてをくさ海へいくりてたうへしをを
をれ代とする金銭あるまを行く世を治〻治〻うり
通ーわううて美人のひうきをひと筆く一張
うせを滅をしを下ちさりまてもおーやうのうき
根元ともいひ伝一一
一世をを滅をを金銭あう或ハうるびやうをくぐけ
をれ或ハあうひとて或ハ微塵とをりてつき数

都の門めゝたるよゝのめををくるもかゝらしを気
もつをしーて毎日を金銭滅をを事一せんめ二
せんめををを十日百日一年十年百年を汚
をりをうをうをうをうをを皆地を入れ底を
八の業業業のはいををれ山をかをる貝松乃徳
あうをやををれ新色ををををを事也
一去上法皇清このこを　伝付をを御歌をを
をて穂化新ををを稀人ー伸ハをれる
れ底ををうをいを張をうををうをくを
をのほをて事を清ハあう金銭乃をを
ををはをーををを
一ををうをれ新ををををををを海と

にさそはれて伊勢國へ
さらせる人〻もまたそれたけすもとし思ひく
よりてもさこうえに或いはすい蓮のあるはな
ア也蓮人のわさうひ〻ひとりあるひ家の
也ものこゝろをもつて蓮をもてんはれ
百姓をやはらんえ百ひせるひ百年これうさを
はうこの船乃蓮わせんたのこそ藤〻波し
はうこうう銀月蓮数すをりせうこうあひて
しさ事ものこゝ日宝れたりこと費〻しき
をうこうこうまうあはこ大ものみ中を百年れ月
よりこうう拾〻皆うく無ぬるあたるようはうり
きうこうはこ海き事にそはうもはけ出はりそうき

國うて山〻に金銀あるいはほしはうりてす
る事ものなしいさこゝをもつこれたるはよを
海に出ものこゝ天下ものこゝ物ものはうり
をや金をハ山より掘出をそ深しとうけう
もものこゝ物ものこゝ蓮ものこゝ貪ものこゝ物ものこゝ
こうこうをある物を掘ものこゝ万年ものこゝ
にうこゝ海ものこゝ国乃智ものこゝ海こうたるに
こゝをといこんもいこゝ石掘ものこゝ伊こうう
一銀月乃はこうこう銀乃はうこうけ銀乃はこうあはこ
いこうこうはうこゝ而こゝすすむ人のいはこ
蓮ものこゝ蓮ものこゝ蓮ものこゝ一八こを入こゝ銀をやこゝ
そのこゝ海ものこゝひやこれものこゝれよこゝのせう様子

ぬまの事ども出てきたりしかはやがて海へ入
と申ほどしるし付何一部の門弟なる乃筆法な
へしとも先と作る上乃作よりひ者さうせーと
て絶とくらまきけるを小仮とのの指よりす
のひきつなそ池のうつる紙とりくる紙海苔し
かすまさせ法ひてとうをうゆ出る作よ付物
よれ未れ事うけるとけまかるしを海ーうにとれ
しーう付うの家へみうてすむもていたんうすま
てみうるといたんう義ものたうよむ問ひすむ
よーう帝よ付うの乃字わうこれをハゆれうと
いみと中院前門前教師しぐたうりて付ま
なうまーかとおほしーごられもよいるる

乃作うこんとてうてをしてうこうの筆
法やとこそ作う付事ぬるこ作とそなまて
春命たりて人せよ書くきられく駆術ぬま
まを作ることすこれそうる学者ものうー我意まは
ーこのれ命ーこ度こまうくおうこせーにおそ
よ乃わうまー時つまく学鼻徳とらへ人り
きて作ーを付山作の事かくおをひうりく
作ることかうこれいハ手ぬうさてわうきあ
れかうる事ひいそそうーてほうのをれと
こうまれこ作を付うこうを付ーこれ学く
きうるをとひてこれを作ーを付ることをきこう
かう義よおうこをわよ程ーこく感をこれよ程ーこく

三代乃宮ゝ御うりもの付つきて第乃抄和そ
とりいそいはそやうもるしれ抄後乃義山抄よ
出くありとくゝ乃せしれきり人の義を我ひ
そうるやうかうけうやとゝ和りいはゝ
れとをいて口和きこゝとわくゝ山抄
うきいうたるゝ表いるのかるのすやとゝひを
きて貞徳寸多ゝて表ゝうるくゝ後よ
いうせうゝ抄ゝりゝれい我ひ出ゝうし時回ゝよ
中ゝる寸ゝ表ゝ和ゝ山義寸ゝて
ゝくゝをゆくゝうきたるゝ表ゝ和ゝれゝ報うゝ
乃せゝうゝ表ゝ和ゝ円ゝれかる事和ゝ
いゝきうゝ抄ゝよいゝきうゝ乃ゝうゝを和ゝかゝし

ゝ和ゝ撰集よいゝゝれゝ
人ゝよゝうゝたゝ和ゝ抄ゝ抄ゝ事ゝ抄ゝ
一名ゝ中ゝうゝやゝて西ゝ
すゝゝゝゝゝゝ抄ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たゝ紙しとうを和うるのちとうる数ひ誰もく
かゝる事はあんんとをーいうれ作るやををく
又ゆゝしをしいるる事なりよつきて
ゝ作りるゝいゝ〳〵をあうるやし
久人南世の人我しこけよ人のよをくらく
うるひをるするのあほとうなきくをさ行の
命ゝたらたるかしをーいうひつるやかは
事ひしいくおもいをんうあうをいひて
ひる事とたるふ十に一うひのこゝる
ゝをあくてやはをへきを付されなよ我いひし
事ちうひあるかゝ利口ていゝくうるくさ
んよりて人をあほうちゝ作るのはつうれ

その大うさとひうしかれ入まるものとなくる
ア友をたうひようゝをうる事いてき人を殺
し法八殺生ををほるほゝをするふをは
うゝうゝうひゝりひて人うる事習ーこれゝ
おゝ乃度ゝりゝくおそるへーたゝひ十よ一殺
分ありゝを人をうゝうゝを生する事
をれ
一作ゝ世乃ゝ作をうるふよゝ海乃事ふ行す
ちゝく人ゝうゝひゝちるものゝ作ゝるものよい
しるまて人ををーをて我をあを人事を事元
事ゝゝゝて人ををまをしくいて
る人ゝゝたゝくゝもへきやうをゝりてひ

[illegible]

命をとゝのへうにとりけしてそこ[illegible]
成[illegible]をを捨て他人よりゆつりて家に
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ておくしめすことするがあれまものめてこれはけさ
わさせ
一行すをふるさせたこそまてさりき今やうい事
よいやしくこそ成ゆくらきかれまのたれたこのの
はたれるうつくしさうけいたものも古代乃歌こ
ておくしとこもまき
第本の事よ
をれわしと行をさこ海ぬはざれど見てこうをけ
よかうをもちりへうそうと時よつけたこはま
をかくこ今やうきにめうたくおくしこを
ありたすこて徳よようりさんのてうとれ
こうりとするはてこまれこやうまこわを雑ものく
たいりる事ちん行まこしのわよてはさ海こに

見てわれ行ることを私今やうい言ていやくこそ
歌行めを古代乃歌こ海こをおくしこをれとけの
たこへうこれと第本の事をようけうこくく
今めこさにうはたりおくしこをけりとい
つるこれ又さる事也たこへうこれ芋の和いまやう
をこれこ作りおんよを時乃人のめよ時ようけ
つめうけうこくおくしこをこうこうもの
ここ後ようるりこてこうとれうこうとしする宝ま
わるわと今やうをこれこそ作りうこんとせんい
なりこうハ海こものめ作りうこんはこはけと
をこれこうこめ事をえまこ
るわさなこくし

一刀わさうにそりを直そと云事三度千年已
まりをやありをんいてさそり見ゆるゆゑよ
世よこれをくやまずすかりを事しやとをしハ
うりうる小歩多霊験持乃数ハ大なる男をと
強方たよこれをあるゆ敵よこれをに強く問く
より集りまうをもつ加さん力わさ作せいよ
命ゆて先くかりをそりわるハわゆむるりかりに
お夢をしとて指乃指なる大力大わさ指さしこ
をしるあるをゆ見ハけいこもをんとをる
をより人教ゆまをゆまををふるるわるさ
ゆの人をれゆよををを乃なるるくをるて
けるほをよゆうはりすを乳うりしてをくを

たるをわるをかをゆ指乃やうるる力をこれをて
さををしいてをもよりをいとを云をりをるハ
同ゆよゆすをりをりをゆ事よゆをれをを
はうをりるわるハを代わりをうゆるよるく
をり直を事をるる指りるるをうをん今新く作る
たるよを代乃強よるるまるハをりにやしく来わ
といるるよを作者乃ふるるわるるをりををける
を志るるを乃ハ乃をやをををて指葉をこの
むわるゆるるりるはりをて乃をよいやしを吹乃
よハるるをや時乃をやりをを強を新乃下作
のあををハを指るるを直を事ををるん指るる時
うはりゆうはりふうるるを事義乃ゆを

事や所々山岡よりおのそれわうの事ひ〳〵さわ也寄附
をそなへめしてまつりていつもれ沙汰よ
を名花をおもめとう名泰平安穏なるひろ長
徳なる城〳〵一百余所飛騨乃中より名花をもいとし
る城八神とを祝ひを造られとをもつ〳〵一人者
ひ〳〵さるうけす法よる細ものけそうよ鹿障を
抑へをもわうとを事をるくけ〳〵うんさ行るを
今ものをを事又世よわるまり〳〵さた晩也まりて
当なのかれうよりをうくかるわや海りをるん
事ハおしくてをもさをれをの事にわをを
世れるの後乃世のたちかるたちひれ事又行
らせをとハうひれ数をを行るを海をくをを行るを

一書ともいふ事をををれたこれ物まり〳〵きをのるの色
とうけの一度人倫乃事をわをれ家法よりを法
乃事ををひをと意ぬををうく新〳〵ものを
かを〳〵〳〵をるを人乃歳のをもけ度をれ
を大なるひを名法を也意ぬをれををを
ををけるよりをるを〳〵けを者る也事乃
まて天下一同乃教てよををにをを世を
よを物すをきを也をを〳〵ををををを
かりをを〳〵をををまををををををを
おりひをを同乃人をを也をを今にをるま
てを数ををを〳〵をりを〳〵伊勢乃人よ
りをまを〳〵き事也過去ををの事よをををり

わらはしの美なる乃ぞまくかくさたうをうき
よ侍りしゆゑ度大みてくゆうにやさしくゆゑん
和国乃ひとりまるうる殺よりとそ見て侍たるに
秋乃月ゆゑとうとくなりうれそて月乃
かさよく就ていとゆる目いひる移て驚とれうき
いるてうとうふとくうしたまれゆたうる夜
ゐ寝そのやはしとあるく数てそ月乃面影を
しくそ恋ととめしめくるとうとひうとと
ゐうとたまそかるそのあんおそうん
ゐうふ業をうよりとうたちし逆をたと
うとうたちそれうゆうるおやうかうるく
せくつまうて引けるそうるよ家ぬし

世りいふはるる事ゆゑはるやとうる侍よ酒をす
ゐとうとうくうとうとうくもるくれませうるう
ゐ人人を急よ社人とうとうそくさいるうくをられ
まくよるるれ面白やとうう前ちうたうまを
ふうとくうくかるる月をみたうる美恋りるく
礼義をうむうう外乃事にくかくうを目
るるひうくん人ハ移くゆ儀とゆをいたうん
やん乃間よかうるるうひたるうと儀ハまそうん
いわやしく梅さにおほしぬくしとうまくう
いまうう今れせよいうようつくうちうを
ゆまくる大酒ようるう景れるゆよみをた
うん幾度くを見ぬるくをれてけるく

と考ひ合らきくきまりさるひれしそを
ほく信いさてら海をぬんうとくを山つまめ
ひの事をりしたいつ山嘉ぬ乃ん傳よりさ
きくいるきしきわさるをしおそひをりて又
海よ奥ありる事をそをくちう山逸しくを
大祇もさしら新ねつしれこの拾まきめ
とちる勿論遠人門よりしよれつよ乃人乃
せられ上を結鈴しー円よ人傷をそれさを
うに借縛して世よ海ーりく
んせよ海ーりすーあるよをのこ也世よ海ーりく
いるをしいつをのるくをるんを乃ん人をれり
をしかるらをたんいをしくすしか海

一回乃ま人とるなる事ハ志りくを信をしやそ
うけるそらとらを一回乃中に海くう
りるを海をんてねるやあん人病乃ありを信
をる陽のくしく死殺をくにをし出を天
いまを病をりんん死よりむをは経ハ書傷
年なの会よなひて生れ中よりなく此事を
成しく法よ家よりそを海勢ん と思ーん病
をうけく死門よりそひ門不敢一事を成をハ
ひりて年内乃解怠を極く山殺ハたちる
とりく命海くせハ事を日ハたくく山事彼
事をとくんぬしてんと彩ひをあらんらと
やくをとりぬまを殺をけんん九をを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

めあやけうを苔子とし童女なくこうみと
をおしうさ人智を幾度も見くに見
と異をへし智をしとせよ見る人童女をこと
えくこ毒乃やまひおくゆるおほ
一親乃子をおもふ慈悲いすへも今もうるる事
をあくこいとんこれ男まする人見れこと
あんを鳥獣畜類その子を愛し祈ハうれとも
思ハかるうんん今わうに見わうしすをたの
祈をして男をして妻より見えそれうをつける
る也誰もくんとうけて見たまへ今ハいやらひ乃
常也形乃衰とてみのるうハ人ちうきるものよ
ハ也とをも人をおそる事おもはゆんせた人

ちうくようんとすまハ悪さるるのこと
し恐よけうるよるまい人ちうくようをを鄙
めしくハをやくふを母さんあの内まをも入
て餅を求ひいうう事まやとくよたうをを
もしハ時ハうをやしうをひ行うゆくよ祈ひをえ
ハ餅ををもあう行くくんをくようををおそれ
すをうるをれハいをあるひをををハ人を
さ和よをけしをまうを幾度をうををゆく
ゑを悲ハ事をうをひをををくをよ逸
よ人ををおうをさをを為ををもるるをを
て見ハ中をををを見てさうをやをををを見ハ今
のをうの町ハ常をうををうやんををいをあく

きむ〳〵ゝとおもふゆゑとろうされあるい
さぬようにあれそこつぶさるすてしらしてさ
られしら我身をこころさるみにあるん教〳〵
れを皆飯ちうん事をいうてこうろうこかるすく
おもひぬんをさこの宿業まて教生をすく
世をこうろうあるとくあるたりとを教るへしお
まへ〳〵おもひくこぬつしをこつを教うよ部
ようかまこうおもりんこたてゆの四まそしたうき
ていさりきに我すをいうたしくあまこれ
をを窠れ四りてこうをさ〳〵ちうをこきこう
まあるん教くはようの月のをけさをのそををや
しをつ時分は里ちうきものはつをうもいをこう

ありれをこうゆをうをゆうをこ〳〵如是我聞〳〵
ひをへはをくを悪癩れ老如ぐ教俗ぐしうやをを家を
てうあ家ふうをあう咒文や

刼外子自空

自庫